昭和１４年大干ばつ

昭和14(1939)年4月～8月

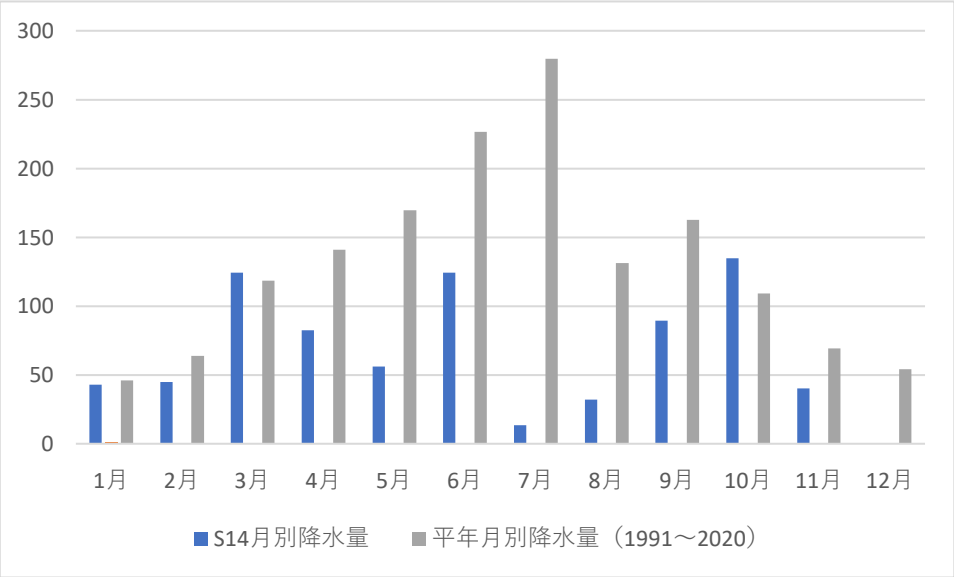
■気象の概要

この年は全国的に雨の少ない年でした。中でも西日本は未曽有の大干ばつに襲われました。「広島県災異史」（広島県農業協同組合中央会、１９８３年）によると、広島県では４月から８月までの総雨量が３０８．３㎜で平年の３５％に過ぎませんでした。７～８月に至っては４５．６㎜にとどまり平年の１４％です。

「日本の気候学の父」と呼ばれた気候学者福井英一郎は「盛夏の小乾燥季」というキーワードを用いて、この年の干ばつを説いています。それによると、干ばつの発生は太平洋高気圧の発達によって晴天が続き雨が少なくなるために起きるほか、低気圧や台風が北上を妨げられて西進する▽晴天や少雨によって気温が上昇する▽気温上昇で蒸発散が多くなり、水不足を悪化させるーとしています。

また福井は１８８７（明治２０）年から４０年にわたる干ばつ被害を調べましたが、九州、瀬戸内、東海に被害が多いことを突き止めました。さらに昭和１４年に限れば、水不足は瀬戸内で最も深刻で、次いで山陰、北九州、近畿西部で深刻だったということです。

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	
降水量の少ない方から (mm)	0.4 (1939/12)	1.5 (2003/10)	1.5 (1998/12)	1.5 (1978/7)	2 (2020/8)	2 (1971/11)	2.5 (1973/12)	2.5 (1940/1)	2.6 (1880/12)	2.8 (1925/1)	1879/1 Mar-23
年降水量の少ない方から (mm)	739.5 -1978	785.3 -1939	917.9 -1883	921.5 -1994	991.7 -1929	1047.5 -2007	1075.4 -1924	1111.5 -1968	1131.6 -1882	1132.1 -1947	1879年 2023年
月間日照時間の多い方から (時間)	311.9 (1942/7)	303.5 (1893/7)	300.5 (1994/7)	299.7 (1978/7)	298.4 (1937/8)	296.4 (1947/8)	286.8 (1923/8)	282.1 (1939/8)	281.4 (1990/8)	277.8 (1922/8)	1891/1 Mar-23
年間日照時間の多い方から (時間)	2408.3 -1939	2333.2 -1940	2297.4 -1978	2293.7 -1983	2263 -1942	2249.5 -1947	2248.8 -2013	2244.7 -1934	2239.7 -1994	2224.4 -1935	1891年 2023年
								観測史上1～10位の値（年間を通じての値） 気象庁資料			



昭和 14 年（1939）と平年（1991～2020）の月別降水量　　（気象庁資料）

■被害の状況

先の「広島県災異史」によると、広島県では水稲の田植え見込み面積の６．２％が「不能地」、５２．８％が「枯死または枯死に瀕した」状況に陥り、２．８％が「枯渇面積」となったといいます（９月１０日時点）。河川の枯渇による水力発電能力の低下、水道貯水池の水位低下のため諸産業への影響も大きかったのです。鳥取県を除く中国地方で同様の被害が発生したとみられます。

島根県では渇水のため宍道湖へ海水が逆流し、塩害をもたらしました。松江市水道部による節水の呼び掛けは「共用栓使用者の中には給水栓を放任したまま平気で洗濯や洗浄を行う例が見受けられるが、県の規則や条例に反する」と厳しく締めくくっていました。

一方、岡山県農林部の冊子によると岡山市の足守川上流にあったため池、黒谷池は５７２ヘクタールの田畑に水を送ることができたため、農作物に大きな被害がなかったと伝えられます。これは１９２４（大正１３）年にも起きた大干ばつの折の大規模な「水争い」を教訓にため池が造成されたためです。黒谷池は県営黒谷ダムに改修され、洪水調節を兼ねた多目的ダムとして現在も稼働しています。

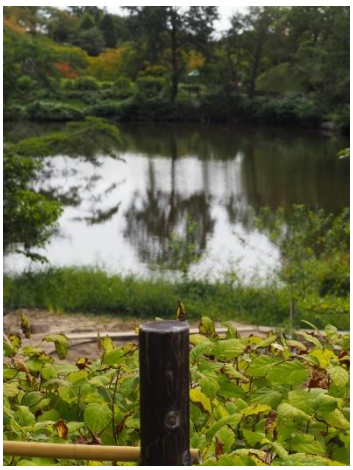
また、広島市佐伯区の観音地区では、この年の干ばつをきっかけに各地でため池の造成が始まりました。地元のまち歩きのサイトによると、戦時下に人力で難工事をやり遂げたそうです。江戸後期の儒学者頼杏坪（らいきょうへい、頼山陽のおい）が「豆のから打つから竹のやぶれ垣人さえもれて荒るる山里」と詠んだほどの村が変貌したのです。

当時は「雨乞い」も各地で執り行われました。広島県庄原市の帝釈峡では「高い山の頂上で火をたく「千把火（せんぱび）」について証言が得られました。「帝釈峡周辺における気象災害についての聞き取り調査」（２０１２年、広島大学考古学研究室紀要）によると、老若男女を問わず集落全体で昼から夜まで火を絶やさなかったといいます。昭和１４年か１５年に見たという証言があります。煙の勢いで雨雲を呼ぼうという意味合いがあったのでしょう。「青うず」といって数人の女性が下半身裸で水浴する儀式もありました。

しかし、この二つの年以降には雨乞いの証言はなく、とりわけ戦後は農業の機械化、過疎．高齢化の進展で消え去ったように思われます。素朴な民間信仰がえてして無視される戦後の風潮とも関係があるのかもしれません。

トピック

広島市佐伯区倉重の広島市植物公園に「うらら池」という愛称の池があります。実は昭和１４年の干ばつに悩まされた土地の人たちが自力で掘ったため池であり「隠里（かくれざと）溜池」が本来の名前です。広島市植物公園の公式ブログにこうあります。



隠里溜池

園内にはうらら池という愛称の付いたため池があり、池のほとりを散策できるようになっています。正式には「隠里溜池」という名前で、広さは６９６４．３７平方メートルあります。このため池はもともとは昭和１４年の大干ばつを受けて、戦時中に作られた農業用のため池です。今日でもその面影は残されていますが、戦後の高度成長期に市街化が進むまでは、植物園の周辺（五日市観音地区）には水田が広がっており、農業用水の水源としての機能を果たしてきました。若いころにはこの池で泳いだことがあるという話を年配の方から聞いたこともあります。その後、平成１３年３月に広島市がため池を取得し、現在は植物公園の一部となっています。

古代の山陽道を「影面（かげとも）の道」と呼ぶそうですが、現在の佐伯区五日市地区の平野部はほとんどが海でした。従って観音地区のような山麓に古代人は早くから住まいしていました。水不足は宿命でしたが、気候風土に恵まれ棚田で稲作を営んできた土地柄ではありました。巨大なガラス温室で熱帯の植物を育てる植物公園の一角に、先人の労苦をしのぶため池が静かにたたずむ風景は、いつまでも残してほしいものです。